立命館大学
化学科同窓会ニュース
═第11号═
編集：立命館大学化学科同窓会事務局
編集責任者：香 山 彰 朗
〒603 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学化学科内
TEL 075-465-1111
(内3645)

定年退職にあたって

高橋玲爾先生

吹く風のさわやかさが、ようやく秋を感じさせるようになりました。長雨の冷夏をやりすごして、同窓会の皆様方ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

私ごと、この三月末をもって立命館大学定年退職の日を迎え、思い出深い化学科と衣笠キャンパスに一応のお別れをいたしました。その節には、同窓会長の懇切なご挨拶とともに、心あたたまる記念の品々を頂戴し深く感謝いたしております。残る人生のはげみと安らぎのために、心の糧として大切に用いさせていただくつもりです。

思えば昭和三十六年四月奉職以来、満三十二年の衣笠キャンパス生活はそのほとんどが理工学部の生長と、驚くべき充実ぶりのうちに過ぎ去ったようで、私にとってのこの半生はまさに記録的な忙しさと厳しさの連続でした。おかげですっかり働き人間になってしまったのでしょうか、退職後の静けさの中にあってはや半歳、ほっとしたそれでいて何やら落着かない気分の毎日をすごしているような有様です。

衣笠一帯は、旧制京都第三中学校(現、山城高等学校の前身)出身の私にとっては、少年時代からのなじみの土地です。山頂は兜狩りの待伏せに、麓の林は教練の舞台に、谷筋の小径はシジミチョウの採集にと、時を忘れて駆け回った所です。その衣笠キャンパスに奉職することになったのは、先年北海道で亡くなった神原富民先生のおさそいがきっかけでした。ポーラログラフィーの研究をやろう、そのひとつのセンターにしようということでしたが、もちろんそうとだけは行かずに残された分析化学研究室の名札は、私にとってはとても大きい重すぎる程のものでした。

私の手元に、昭和三十六年冬頃に撮影された化学科教室会の先生方九人の写真があります。そのうちおふたりはすでに故人であり、他はすべて定年退職されています。その最後が私です。この写真のすぐ後に着任された三人の先生方も、すでに定年退職されました。折しも立命館大学理工学部自体が拡充移転事業によって草津に移り、衣笠の地からは去ることになっています。このように見てくると、今年こそ衣笠化学科が、生長充実の活動を完うして、その幕を閉じるとき——そのような思いがしてなりません。

もちろん理工学部も化学科も、来年四月には、恐らく見ちがえるばかりの偉容と充実ぶりをもって琵琶湖キャンパスにふたたび生まれ出るはずです。計画によれば、まるで独立した理工系単科大学ほどの規模をもったすばらしい理工学部のようです。衣笠で充分に体力をつけたチョウの幼虫が、一挙に壮麗な成虫に脱皮するのにも似た快挙といえるでしょう。しかし、私などそして同窓生の多くの方々など、その壮年時代をあるいはその青春時代を衣笠キャンパスにあって苦楽をともにして来た者達にとっては、衣笠のアオムシ・ケムシが、また堪えがたい親しみと懐しみをもって、いつまでも思い出されるのではないでしょうか。同窓会がそのような心の支えとして、いつまでもあたたかく力強く活躍されることを願ってやみません。

着任当時、故神原先生とともに

高橋玲爾先生を送る言葉

化学科主任
山 本 善 史
(昭和35年卒)

化学科同窓会会員の皆様、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

略歴 昭和二十六年三月京都大学農学部農林化学科卒業。昭和三十六年四月立命館大学理工学部助教授。昭和三十八年四月同教授。平成五年四月立命館大学名誉教授。この間、理工学研究所長、入試委員会副委員長始め学部・学科の主事・主任等各種役職を歴任された。

高橋玲爾先生を送ることば

トヨタ車体㈱
小谷嘉憲
(昭和37年卒)

化学科同窓会の皆様、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

高橋先生は昭和三十六年四月に助教授として就任され、昭和三十八年に教授に昇任されました。理工学研究所所長、理工学部主事、大学協議員等多くの役職を歴任され、本学の発展に多大の貢献をなさいました。又、先生は日本農芸化学会、日本分析化学会、日本ポーラログラフ学会で活躍されました。

高橋先生が昭和三十六年分析化学研究室に着任された時は、故榊原先生とのコンビでポーラログラフを我々に教えて頂きました。非水溶媒(確かオキシンの分析だったと思います)のポーラログラフで、極大波のインヒビターを探しに林先生の研究室に一緒に行った記憶があります。これこそ、今思えば会社でいうOJTであり、学び方の教育だったと思います。ともすれば一般に先生とは近づきにくく、おっかない存在と思っていました。若い時代に一つの新しい印象を感じました。当初考えていた分析化学は定性・定量分析と思っていたものの、学問の中に理論式・実験式(数式で整理する)を学んだことは、卒業後の私の企業生活に大きく物の考え方を変えるものとしました。又、当時、統計的な考えは現在ほどには活用されていませんでした。しかし当時はタイガー計算機で分数・偏差等を学んだことも、固有技術と共通技術の考え方が既にあったことを示しています。科学・化学の基礎が分析であることは今でもそう思っています。そして、若い時代に良い先生に恵まれ学んだことが私の誇りであり幸いだったと思います。卒業後は就職のこと、技術的な相談にも快くのって頂き、いつでも明るく気持ちよく迎えて頂きました。

先生の人となりは多くの卒業生に影響を与えたと思っています。

先生の退職にあたり御功績を讃えますとともに、多年にわたり数多くの卒業生へのご指導、学園発展への御尽力をこころから感謝致します。有り難うございました。聞くところによりますと大学へもみえている様ですので、今後も御指導をお願い致します。

最期に先生の今後のご健康と今後の御活躍をお祈りすると共に、化学科のますますの御発展を期待しています。

化学科紹介

いよいよびわこ・くさつキャンパス(仮称)への移転を目前にし、あわただしくなってまいりました。本年度も、高橋玲爾先生の御定年退職と入れ替りに、三名の先生方をお迎えし、移転・新学科設置の準備を着々と進めております。

以下に新任の先生の御紹介「Part1とPart2」と今年度の化学科の研究室の紹介をさせていただきます。

PART 1

新任教員紹介

〈会員へのひと言〉

科学技術セミナー

企業経営を狂わせる知的所有権

元・㈱神戸製鋼所
技術法務部長
龍野正行
(昭和34年卒)

一〇〇億円を超える多額の損害賠償金を米国特許権侵害の代償として、日本の大手カメラメーカーM社が米国のH社に支払うというすさまじい事件が起こったのはつい最近のニュースである。M社が国内で製作して米国市場で販売して来たオートフォーカスカメラのAF機構がH社の米国特許を侵害するとH社が主張する米国での特許侵害訴訟でM社が敗訴したのである。M社はその結果、赤字を計上したばかりか、経営トップも交代し、文字どうり経営は根底からくつがえされることになる。

技術をめぐる知的所有権紛争は、とりわけメーカーにとって製品の製造・販売に重大な経営上の影響をおよぼす。権利を主張する企業と受け手に立たされる企業がそれぞれどのようにして経営面の利益をまもって行くのか、三つの実際に経験した例を紹介する。

(1)客先からの引合いに応じて二・三社が商談を進めている過程で、米国企業が、競合する日本企業に対して、米国特許侵害の民事訴訟を連邦地裁に提起し、商談を有利にしようとしたが、15ヶ月の裁判で日本企業は全面勝訴する。(2)客先から受注して製作し納期近くになった時点で、その客先と同業の他のメーカーから、契約違反および特許権侵害の二つのクレイムをその受注企業が受けるが、苛酷な交渉過程を経て和解に達し、うまく納品できる。(3)ライバルメーカーが権利成立前の特許出願にもとづく権利的なアピールを業界内で展開してシェアアップ作戦をはかるが、特許成立前後になってライセンス方式による全面和解に至り平和にもどる。

少し解説を加える。(1)のケースは、客先を前にした日米2大メーカー間の受注戦の中で発生した特許訴訟であるが、被告の日本企業は、裁判官の和解勧告に対しても中途半端な和解をせず、しかも陪審裁判をうまくくぐり抜けて勝訴し、徹底抗戦の方針を貫く。(2)のケースは〔付図〕の関係にある。A社は古くからC社とある種の協力関係にあって、その関係を定めた契約条項に違反するというのがC社の主張であるが、その背景にはB社とC社とが同業の競争関係ということがあり、これこそ事件のキーだといえる。(3)のケースは、大手数社が構成する一つの業界内の争いで、似たような製品を各社で供給し合っている情況下で、シェア拡大という営業戦略の中で特許が武器にされた事件である。

＊　＊　＊

知的所有権紛争は法律事件だが実質は企業経営面のトラブルである。特許やノーハウは企業の重要な経営資源であり、利益のためにどうこれらを生かすか、トラブル面でどう解決処理するか、企業経営の収益を左右する問題といえる。まとめてみると…。

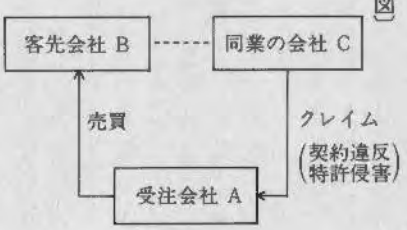
〔知的所有権を確保する立場〕

投資をともなう自社開発で得られた良い技術を企業のトップが卒先して知的所有権として法的に保護する政策を社内で徹底させることが重要。この方策はトラブルの予防に有効なばかりか、ときには競争相手を攻める武器としての法的な権利となる。

〔トラブル解決の基本パターン〕

攻守いずれの立場にしろトラブルが現実のものとなった場合、①訴訟を覚悟して徹底的に争う方法と、②話し合いによる平和的解決とに経営方針が大別される。①は攻守双方にとって大きな経営的リスクをともなう。②の平和的解決は前向きに考えるほど多くの選択枝があり、現実的処理として好ましいが、判断と見通しを誤まると、とり返しのつかない経営損失をもたらす。いずれにせよ、企業経営を狂わせる知的所有権の本質がみえる。

〔付図〕



〔参考：新しい知的所有権動向〕

●特許　年間30万件を超える日本は世界の特許大国。物質特許、遺伝子工学からソフトにいたるまで特許がカバーする領域は拡大の一方。

●実用新案　世界との調和をはかるために、近く特許庁による審査手続を廃止して制度の簡略化を進める見通し。

●著作権　コンピュータープログラムはすでに権利対象に追加され、そのリバースエンジニアリングの取り扱いが次の問題となっている。

●商標　商品ブランドが永年保護されて来たのを拡大して、サービスマークも登録して保護されるようになった(たとえば、運輸、金融関係等)。

●トレードシークレット　契約による保護を超えて、不正競争防止法を改正し、企業の保有する経営上の秘密情報、たとえばノーハウ、顧客名簿等を積極的に保護できるようにした。

民秋　均

本年四月より新設の生物有機化学担当として赴任いたしました民秋(たみあき)と申します。様々な有機化学的手法を用いて、生体機能…特に、光のかかわる現象(光合成など)…を分子レベルで解明するという研究をメインテーマとしております。来年生物工学科が新設されますと、新学科へ移籍する予定であり、新キャンパス移転に伴い設備も一新されますので、世界のトップレベルの研究を行なっていきたいと考えています。同窓会の皆様のもとで、有機化学に関して何か問題が生じましたら、何なりと御相談いただければ幸いです。谷利教授(天然物有機化学担当、生物工学科移籍予定)とグループを組んで、学生・院生の研究・教育を行なっていく所存ですので、弱輩ではございますが、御指導御鞭撻の程よろしくお願い致します。

略歴　一九八一年京都大学理学部卒業。一九八六年同大学院理学研究科博士後期課程修了、同大学理学部研修員(日本学術振興会特別研究員)。一九八七年同学部化学教室助手。一九九三年四月本学に着任。理学博士。

科学技術セミナー

生物資源化学のすすめ

化学科教授
立木　隆

一、はじめに
―技術と資源―

化学に携わる人はもちろんのこと、世の中全体が、新しい材料（新素材）やそれを作る技術の開発に、いつも注目している。

新素材は、目的の性能を持たない（または劣った性能の）原料から作られる。いうなれば、「ありふれたものから、珍しい新しいものを作る」ということである。「原料」→「新素材」→「製品」というような単純な図式でも表せるだろう。そして、「製品」の価値を主な基準にして、「新素材」とその製法が評価される。しかし、その時には「ありふれた原料」のことや、できたものの行末については、（経済効率の立場からはともかくとして）配慮されないことが多い。地球規模では、ほとんどの原料が有限で、やがて手に入れることも困難になるということや、まわりへの影響、あとの始末のことなどを忘れているように思える。

新素材の開発というような、ある一つのことのために、余計なことは見ざる・言わざる・聞かざる・考えざるで、一心不乱になるのも結構だが、時には全体を見渡すことが必要だろう。肩ひじはらずに思いをめぐらすのも、一興ではないか。

そういうわけで、生物とその構成成分を、再生可能な原材料資源として考えてみたい。

二、生物資源の種類

とりあえず次のように分けてみる。

(a)バイオマス：　もともとは「生物現存量」や「生物量」をあらわす生態学用語だが、今では固定された太陽エネルギーとして、あるいは食料・飼料・工業用原料として利用できる生物体（または生物体集団）、という意味になってきている。食品その他の生産や加工処理の過程で廃棄物として副生し、未利用のままになっているものも、環境の維持・改善などの複合的な観点から、この中に含める。

(b)生体物質：　生物を作っている分子は多種多様だが、無系統に多種多様なのではない。全生物に共通な、比較的限られた数の基本物質から構成されているが、組み立て方のわずかな差によって性質が異なってくる。

具体的には、糖質・脂質・タンパク質・核酸・ビタミン・二次代謝産物と、これらを作っている基本物質のことで、「原料」として利用できるものも多い。高含量のバイオマスから取りだすが、生物の物質転換能を利用して、他のものから作ることもある。

(c)特別な機能を持つ生体物質：　ある原料に生物を作用させ、その物質転換の力によって、別の製品を作る方法が昔からあった。微生物による「発酵・醸造」がその代表だが、次第に理論的に整理され、多様な生体物質を生産できるようになった。動植物の細胞も、微生物細胞と同じように利用できる。また、物質転換を触媒する酵素の実体が明らかになるにつれて、一段階あるいは多段階反応や、生体内には無い新しい反応を用いて、物質を合成する手法も開発された。化石化合物・合成化合物も原料として使える。

免疫・神経伝達・（細胞の）自己認識などの、生体応答現象に関与する生体物質を機能性材料として用いることや、生体物質を遺伝子操作によって改良・設計することが、可能になっている。

三、生物資源の特徴

第一の特徴・利点は、生物によって作られ分解される、つまり自然界の物質循環系に組み込まれ得る、ということである。生物は太陽エネルギーの効率的な変換・貯蔵システムであり、適正に利用しているかぎり、環境への影響も少ない、再生可能な永続的資源となる。限られた場所にしかない化石資源とはちがって、各地域で自給できる。

第二はよく言われていることで、生体物質や生体反応の化学的特性によるものである。たとえば、低分子物質が光学異性体で、多くの高分子物質が定序配列性であること、常温・常圧のプロセスの設計が可能であること、などである。汎用物質の大量生産だけでなく、高付加価値物質の少量・多品目生産にも適している。

第三として、新しい材料・反応・プロセスが開発される可能性が高い、ということが挙げられる。これは、逆に言えば、我々の生物についての知識が不十分ということであり、生物に対する分子レベルでの理解を深めることがまだまだ必要、ということを意味している。

生物資源の利用を経済的に成り立たせるためには、解決しなければならない問題が、それこそ山ほどある。しかし、地球資源の節約や環境の保全のためには、生物資源をできるだけ、現在使っている原料と置き換えていく努力が必要だろう。それを考え、始める時が来ているのではないだろうか。

四、おわりに

―応用化学系生物工学科―

Humanistic Science and Technology という意句を掲げて、理工学部が「びわこ・くさつキャンパス」へ移転する時に、生物工学科が新設される予定である。生物工学科は、化学科と「応用化学系」を構成し、生物（細胞）の働きや生物（細胞）間の相互作用を、化学的視点にたって理解し応用することを教育・研究する、ことになっている。したがって、教育・研究の基盤は化学である。

ただ、その名前から、「バイオテクノロジー」＝「遺伝子工学」だけをするところ、と短絡的に思いこまれるおそれが、多分にある。「バイオテクノロジー」という言葉は比較的新しいものだが、その中身は、生物に関わりあいの深い科学や技術分野の中にもともとあったもので、特別に新しいものではない。既存の学問分野にとらわれないで、総合的に生物について考え、応用しようとして、生命科学やバイオテクノロジー（という概念）が生まれてきた経緯からすれば、生物工学科が遺伝子工学だけをするところではない、ということはすぐにわかるはずである。その過程で化学が果たしてきた役割は大きく、またこれからもそうであるから、生物工学科の教育・研究の基本が化学になるのは、当然である。

大事なことは、何をするのか、何を目標にするのか、ということである。バイオテクノロジーの、現在の、そして将来の使命を考えることであり、これは、大げさに言えば、倫理や哲学を作ることになる。

「生物資源化学」も、それらをあらわすものの一つかもしれない。

トピックス

医薬品業界の社会的貢献

マルホ㈱取締役生産部長
東　正弘
(昭和41年卒)

医薬品企業で永年に亘り、薬業界・医療界と接してきました。

我国経済は、一昨年来の大型不況の中で、急激な円高により多くの企業が減益を余儀なくされていますが、医薬品業界は景気循環に左右されにくい背景にあり、相対的に堅調な収益を維持しています。しかし、医薬品業界を取り巻く環境が国内外を問わず激しく変化しようとしています。一昨年来進められている流通改善や昨年の薬価改正など厳しい環境下ではありましたが、各企業の経営努力により苦境を克服しつつあります。一方、人口の高齢化、医療の高度化に伴う医療費の膨張は、世界共通の問題となり、医療費の抑制と医療制度の改革の必要性が各国で論議されています。

さて、医薬品は医療技術の進歩と共に、国民の健康に関与してきました。近年高齢化が進むにつれて、成人病と総称される長期慢性型の疾病の比重が高まっています。これらの疾病の多くは、薬物療法などによってコントロールされ健康な人と変わらない生活を送れるようになっています。このような医薬品と医療技術の進歩で、疾病の克服、延命、生活の質を向上させ、その社会的利益ははかり知れないものがあります。それもまた同時に医療費の節減など社会的コストを低減するうえでも貢献しています。

日本人の平均寿命はご承知の通り近年世界でも類をみない程伸びてきました。このように長寿社会になった要因は先程述べたように、医薬品の開発と医療技術の進歩が大きな要素ですが、日本の教育水準が高くなり国民の病気に対する知識が向上したことも見逃すことはできません。

医薬品業界の営業担当者のことをMR（Medical Representative 医薬情報担当者）と呼び「医薬品の適正な使用と普及を目的として、医薬品の品質、有効性、安全性などに関する情報の提供、収集、伝達を日常業務として行う者をいう」と日本製薬工業協会において定義しています。同窓諸兄でMRに従事されている方も大勢おられますが、MRを取り巻く環境も変化してきました。建値制導入による流通改善や新医薬品等の再審査の申請のための市販後調査への役割機能がより高度化されるようになり、MRの適正な活動をプロモーションコードに作成し、各社で社内体制を整備することになりました。

このようにMR活動が医療参加型の方向に大きく変化しつつあります。今年はMR就職希望者も増加してきました。化学専攻者には生かせる業界と思います。堅苦しい話題提供になりましたが、多くの同窓諸兄の御活躍を祈念して筆を置きます。お読み頂き有難うございました。

PART 2

新任教員紹介

〈会員へのひと言〉

森崎久雄

本年四月より生物物理化学担当として赴任致しました。十四年ぶりの懐かしい関西です。自然環境中での微生物の生理・生態を、微生物と界面間との相互作用を通じて理解することを研究の目標とし、微生物の吸着力の測定、界面における微生物活性、自然環境から単離された微生物細胞の表面特性などに関し研究してきました。もともとは化学出身ですが、微生物を使い初めてすでに十四年が過ぎ、今では化学、界面科学、微生物学が頭の中で共生しているように感じています。これら各分野の言わば境界領域でユニークな研究を展開できればと願っています。また、来年から自然豊かな琵琶湖畔に移転しますが、環境面にも理解の深い学生を育てたいと思っています。

同窓会の皆様には今後いろいろお世話になるかと思いますが、よろしくお願い申し上げます。

略歴　一九七四年三月大阪大学理学部化学科卒業、一九七六年三月同大学院理学研究科修士課程修了、一九七九年三月同博士課程修了、一九七九年四月東北大学農学研究所（現遺伝生態研究センター）助手、一九九三年四月本学に着任。

大瀧仁志

平成五年三月に岡崎国立共同研究機構分子科学研究所を定年退官し、はからずも立命館大学にお世話になることになりました。このような関西の名門校に再度の職を得ることができたことは大きな喜びであり、お招き下さった関係各位の御厚意に感謝しております。

まだ卒研生も大学院生もなく、勿論共同研究者もなく、独りぼっちの身の上ですが、びわこ・くさつ新キャンパスに移れば一人前に忙がしくなるだろうことと、今から覚悟だけはしっかりとしております。

これまで溶液化学という比較的地味な分野におりましたが、最近は凝縮系に対する分子論的研究が盛んになってきたため、いささか先導的役割を果してきたかとこれまでの長い道のりをふりかえっております。

本学に赴任した以上は当立命館大学を関西のトップどころか国際的な一流大学に発展させるべく微力をささげたいと考えております。

関西弁の中に埋まって暮らすのははじめての経験ですが、狭い日本の中で、しかもわかる言葉の中に居るのですから何も驚くことはないと思い、相変らず図々しく、且つノーノーと過しています。今後ともどうぞよろしく御交誼のほどお願い申し上げます。

略歴　一九五五年名古屋大学理学部化学科卒業、東京工業大学理工学部付属原子炉研究施設助手、スエーデン王立工科大学博士研究員、名古屋大学理学部講師、助教授、東京工業大学工学部助教授、教授、同学大学院総合理工学研究科教授、岡崎国立共同研究機構分子科学研究所教授、同研究所錯体化学実験施設長、総合研究大学院大学教授（併任）、同学数物科学研究科長。一九九三年三月定年退官、東京工業大学名誉教授、理学博士。

会員のページ

合田美術館館長
合田美術学院理事長
日本芸術協会理事
第一美術会員
画家
合田芳弘（昭和39年卒）

世界一長い絵巻に挑戦
中山道六〇〇kmを
三万mの絵巻に描く

立命館で学んだことが絵巻を発見

私は昭和三十五年より三十九年迄、衣笠山の麓の理工学部化学科で学んだ。卒論は、立花精先生の生化学教室であった。ビタミンB_{12}の研究であった。この時、これから研究する時、誰もやっていない研究をするには、現在どんな研究がなされているか知ることが大切であり、それは〝メルクインデックス〟と言う本を調べることが第一歩であると教わった。この方法は、画家として、他の人がやっていない方法で、一生のテーマを持って描き続けるためにはどうすればよいかを見つける事の考え方に通じていた。絵巻は、日本的材料であり、町並を描くことは、江戸時代の浮世絵のように、その時代を描くことにより、後世にその風俗を残すことの出来る方法であり、誰もやっていない分野であった。

中山道の町並を描く魅力

私の住んでいる中山道は、日本橋より数えて十番目の宿場町で、現在も百年以上の建物が、数多く残っている古い町並のある所である。尚、中山道は中仙道と書かず、山を書いて〝せん〟と読ませるのは、東海道に対して山の方の道ということから名づけられたという。

なぜ街道を描くのか

深谷市は東京から七十キロに位置し、ここにも都市化の波がおしよせ、高層マンションが建ちはじめ、古い町並は大きく変貌しようとしており、画家として、今、描き残しておかなければ、永久にわからなくなると思い筆を取った。最初は一枚ずつ描いていたが、六年前に、現在のこの街のふんいきを、そのまま残す方法はないかと考えた。これが絵巻であった。それも長がーい絵巻にすることであった。

一巻二百米の合成紙に夫婦で挑戦

深谷市を通っている中山道の町並八キロを、建物や一木一草に到るまで、出来るだけ細密に描くのによい方法はないかと考え、これぞ、立命館で学んだ方法を絵画に応用しようと考えた。「日本的な発想で、日本的な材料で、誰もやっていない方法」で描くことを思いついた。合成紙の長さはつなぎ目なしの二百メートル、巾五十二センチ、重量は一巻二十キロと重い。一人で描くのは大変なので、夫婦で一生のテーマとして取り組むことに決定した。これ迄の道のりは長かった。

ライトバンがわがアトリエに！

沿道の風景を切れ目なく、中山道を歩いて見ているように描くため、ライトバンの中に絵巻を持ち込み、一軒ずつ、家の前に車を止めて反対側の家並を描く。中山道は道が狭く、市街地は大変だ。早朝や夜中に描く。商店街は街燈のおかげである程度明るく、夜九時頃から朝方までが描き時で、どうしても見えない時は、サーチライトで照らして描く。車の中に携帯用蛍光灯を持ち込み、手元を照らす。冬はアンカ、夏は蚊取り線香を付けて虫との戦いだ。合成紙には、下地材を何回も塗り、毛筆と墨でスケッチし、画材一式を積み込んだワゴン車がアトリエである。私が素描きをし、妻が着彩して行く二人三脚のスケッチである。一日絵巻して数メートルがやっとである。

現在の浮世絵をめざして

道行く人の服装や自動車、塀に貼られたポスター等を細密に描いていく、建物だけでなく、風俗を描き込むことによって、浮世絵のように、後世、歴史に残るに値する絵巻にすることが出来るのではないかと考えた。

飯沢　匡　先生と絵巻談義

市民に支えられて描く喜び！

六年前に描き始めた頃は、車の中から描くので、写生されている家の主人に不審がられたり、描く家の反対側に車を止めて描くので、自分の家の前に車を止められた商店主からは文句を言われたり、駐車違反として警察に注意されたり大変であった。最近では、市民の理解も深まり「頑張って」と声をかけられ、お茶を差し入れてくれたりして描く喜びが出た。

これからの予定

深谷市から四、五年後の日本橋をめざし、現在鴻巣市で描いている。さらに京都迄の中山道六百キロを三万メートルの絵巻にこれから三十年かけて描く予定である。夢は大きく、一生の仕事である。（東京立命22号より許可転載）

年会費等の納入について のお願い

一、平成五年度の年会費の納入への協力のお願い

平成五年度年会費（平成六年三月三十一日迄）二千円を納入下さいますようお願い申し上げます。

年会費は、会運営の柱です。全会員の皆様が完納下さいますようお願い申し上げます。

送金には、同封の振替用紙をご利用下さい。なお、領収証は、郵便局の発行する受領証をもって代えさせていただきます。（注：平成五年三月卒の一部の会員は、平成五年度分の会費を納入済です。）

二、会員名簿（第三号）の発行と販売のお知らせ

昨年六月に、「化学科同窓会会員名簿（第二号）」を発行致しました。本版には、平成四年三月までの卒業生の氏名、現住所、勤務先及びTELが記載されています。

名簿代は、一冊二千円です。多数の方々が購入下さいますようお願い申し上げます。送金には、同封の振替用紙をご利用下さい。

（郵送希望の方は、別途五百円を送金下さい。）

三、寄付金募金についてのお願い

会運営を円滑に行うために、運営資金の一部として、寄付金を募っております。**寄付金は、一口二千円**として何口でも承っております。ご送金の際は、会費納入振替用紙をご利用下さい。

四、事務局への連絡について

会員の住所変更、会費納入、寄付等についてのお問い合わせは、ハガキまたは電話でご連絡下さい。

事務局の電話は、

（TEL〇七五―四六五―一一一一　内線三六（四五））

（FAX〇七五―四六五―八二三七）

研究室の構成及び卒業研究テーマ

研究室名	スタッフ	1993年度卒業研究テーマ
物理化学Ⅰ研究室	理博 北村 清教授	選択性透過膜、単分子膜および累積膜
物理化学Ⅱ研究室	工博 谷口吉弘教授	生体高分子溶液の構造・反応・物性
物理化学Ⅲ研究室	工博 澤村精治助教授	液体・溶液の高圧物理化学
工業物理化学研究室	工博 山本善史教授	燃料電池、各種化学電池、固体電解質、固体イオニクス
無機化学Ⅰ研究室	理博 大瀧仁志教授	溶液化学、錯体化学、溶液の構造化学と反応論、分子動力学シミュレーション
無機化学Ⅱ研究室	理博 小島一男助教授	結晶、非結晶、錯体およびセラミックスの構造と物性
無機材料化学研究室	工博 金子泰成助教授	粉体の成形、スパーク法による窒化物合成、リン酸カルシウム系化合物合成、粉体のメカノケミストリー
分析化学研究室	理博 松田十四夫助教授 白石晴樹助手	電気分析、分離分析、環境分析、有機電気分析化学
有機化学研究室	工博 中村尚武教授	直鎖長鎖化合物、液晶、液晶関連物質の構造、物性
有機反応化学研究室	理博 林 隆俊教授 工博 岡田 豊助手	フェロセン誘導体の合成・構造・反応、クライゼン転位反応
天然物有機化学研究室	理博 谷利陸平教授	不斉合成、有機硫黄化合物の合成反応
生物化学Ⅰ研究室	農博 深海 浩教授	化学生態学
生物化学Ⅱ研究室	農博 立木 隆教授 塩出十一助手	有用酵母の遺伝育種、微生物による有用物質の生産
生物物理化学研究室	理博 森崎久雄助教授	微生物細胞の表面物性の解析および微生物一界面間相互作用の解明
生物有機化学研究室	理博 民秋 均助教授	生体機能の分子レベルでの解明

「理工学部衣笠学舎さよならの集い」の予告

すでに、新聞、テレビなどでご承知のように立命館大学理工学部は、来春4月「びわこ・くさつキャンパス(仮称)」に拡充移転致します。

それに先立ち同窓生の皆様の思い出多き衣笠学舎での「さよなら式典」が下記の通り計画されています。同日午前中の各学科別企画では**化学科同窓会としての企画を計画中です。**同窓生の皆様お誘いあわせの上、御参加いただきますようご案内申し上げます。

開催日時：1993年11月23日（祝日）

10:00～12:00 各学科別企画 （化学科同窓会企画準備中、詳細は後日化学科同窓会より御案内致します）

13:00～14:00 全体企画「さよなら式典」

記念講演 大南正瑛総長

「理工学部発展の足跡と新キャンパスでの展望」

終了後、バスにて新キャンパスを見学し、懇親会場へ。

17:30～19:30 懇親会 草津エストピアホテル（ＪＲ草津駅西口下車徒歩3分）

参 加 費：本人 6,000円（記念品、バス、懇親会費）同伴者の参加も歓迎（一人 4,000円）

全体の申込方法等詳細は10月下旬発行の校友会紙「きぬがさ」でお知らせされる予定です。

平成４年(1992年)度事業報告

Ⅰ．諸事業

1）企業ガイドブック(第３号)の発行	'92・4・20
2）在校生への企業ガイドブックの配布	4・下旬
3）全会員への通信(１回目) (総会の案内、名簿発行の案内、年会費の請求等)	5・下旬
4）在校生への通信(１回目)	5・下旬
5）名簿(第３号、全会員掲載版)の発行	6・中旬
6）第４回総会の開催 (講演会、懇親会も開催)	6・21
7）平成４年３月卒業生名簿作成	10・20
8）同窓会ニュース(№10)の発行	10・20
9）全会員への通信(２回目) (ニュース、第９回科学技術セミナーの案内、年会費の請求等)	11・上旬
10）在校生への通信(２回目) (ニュース、セミナーの案内等)	11・中旬
11）第９回科学技術セミナー	12・6
12）定年退職の教員への記念品贈呈	'93・3・

Ⅱ諸会議

1）幹事会	
第１回	'92・6・7
第２回	12・6
2）事務局会	
第１回	6・7
3）常任幹事会	
第１回	11・28
4）諸会議	
a）同窓会ニュース編集委員会	'92・7・25
b）セミナー等運営委員会	9・26
c）募金委員会	5・26
d）大学関係者とＯＢ企業経営者との懇談会	10・24

Ⅲ．在校生(卒研生・院生)への援助活動

1）研究室対抗ボーリング大会	'92・7・9
2）卒業・修了記念パーティー	'93・3・20

平成５年(1993年)度事業計画

Ⅰ．諸事業

1）企業ガイドブック(第４号)の発行	'93・4・20
2）在校生への企業ガイドブックの配布	4・下旬
3）同窓会ニュース(№11)の発行	8・下旬
4）平成５年３月卒業生名簿作成	8・下旬
5）全会員への通信(１回目) (同窓会ニュース、年会費の請求、新卒者名簿等)	9・中旬
6）在校生への通信(１回目) (同窓会ニュース、新卒者名簿等)	9・中旬
9）全会員への通信(２回目) (第10回科学技術セミナーの案内、年会費の請求等)	11・上旬
10）在校生への通信(２回目) (セミナーの案内等)	11・中旬
11）第10回科学技術セミナー	11・下旬

Ⅱ．諸会議

1）幹事会	
第１回	'93・6・6
第２回	10・
2）常任幹事会	
第１回	6・6
第２回	10・
3）諸会議	
a）同窓会ニュース編集委員会	必要に応じて年数回
b）セミナー等運営委員会	〃
c）募金委員会	〃

Ⅲ．在校生(卒研生・院生)への援助活動

1）研究室対抗ボーリング大会	'93・7・
2）卒業・修了記念パーティー	'94・3・21

平成４年度決算報告

一般事業会計

＜収入の部＞	当初予算額	執行額
繰越金	1,502,134円	1,502,134円
会　費	4,215,000＊	4,188,000
寄付金	500,000	455,500
企業ガイド掲載料	1,079,588	1,019,176
雑収入	200,000	86,252
合　計	7,496,722＊	7,251,062
＜支出の部＞	当初予算額	執行額
総会開催費	200,000円	195,240円
セミナー等補助費	200,000	97,173
会議費	120,000	60,359
印刷費	850,000＊	805,718
企業ガイド作成費	600,000	599,358
郵送費	1,150,000＊	1,129,301
人件費	600,000	600,000
事務局費	40,000＊	31,607
雑　費	100,000	94,605
拠出金	3,000,000＊	2,000,000
在学生の活動援助費	100,000	96,797
振込み料金手数料	100,000＊	65,100
予備費	436,722	422,665
次年度繰越金		1,049,499
合　計	7,496,722＊	7,251,062

特別事業会計

＜収入の部＞	当初予算額	執行額
繰越金	2,665,279円	2,665,279円
拠出金	3,000,000＊	2,000,000
名簿売上（一般）	250,000	198,400
名簿売上（学生）	150,000	85,000
名簿荷造送料	450,000＊	411,600
名簿広告掲載料	530,000	470,000
雑収入	60,000	45,485
合　計	7,105,279＊	5,875,764
＜支出の部＞	当初予算額	執行額
名簿出版費	2,100,000円	2,008,912円
名簿荷造送料	400,000＊	365,487
人件費	700,000	602,232
事務局費	50,000	39,435
予備費	3,855,279＊	0
次年度繰越金		2,859,698
合　計	7,105,279＊	5,875,764

＊'92.12.6幹事会にて変更・新設承認

平成５年度予算

一般事業会計

＜収入の部＞	
繰越金	1,054,489円
会　費	2,000,000
寄付金	500,000
企業ガイド掲載料	1,000,000
雑収入	100,000
合　計	4,654,489
＜支出の部＞	
総会開催費	0円
セミナー等補助費	200,000
会議費	120,000
印刷費	850,000
企業ガイド作成費	500,000
郵送費	1,200,000
人件費	800,000
事務局費	40,000
雑　費	100,000
拠出金	100,000
在学生の活動援助費	100,000
振込み料金手数料	100,000
予備費	544,489
合　計	4,654,489

特別事業会計

＜収入の部＞	
繰越金	2,859,698円
拠出金	100,000
名簿売上（一般）	100,000
名簿売上（学生）	100,000
名簿荷造送料	25,000
名簿広告掲載料	0
雑収入	60,000
合　計	3,244,698
＜支出の部＞	
名簿出版費	0円
名簿荷造送料	20,000
人件費	500,000
事務局費	50,000
予備費	2,674,698
合　計	3,244,698